



発掘調査報告書

杭木中山横穴墓

2000.4

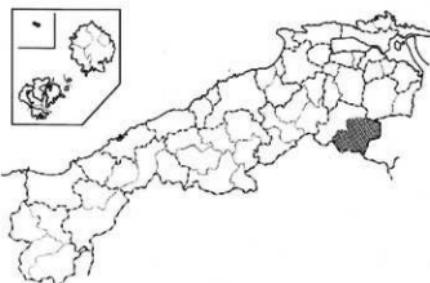
島根県

横田町教育委員会

例　　言

1. 本書は、島根県木次農林振興センターより委託を受けて、発掘調査を実施した大谷地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う杭木中山横穴墓発掘調査報告書である。
2. 所在地　　島根県仁多郡横田町大字大谷字中山1345-7
3. 調査期間　　平成12年3月28日～平成12年4月30日のうち延べ10日間
4. 調査体制は次の通りである。

| | |
|-------|--|
| 調査主体 | 横田町教育委員会 教育長 浅野俊夫 |
| 調査指導 | 島根県教育庁文化財課、井上晃孝（元鳥取大学法医学教室助教授） |
| 調査担当 | 高尾昭浩（横田町教育委員会主事） |
| 調査員 | 同 上 |
| 調査補助員 | 石原達也（横田町教育委員会） 森田安紀子（島根大学学生） 伊藤 緑（島根大学学生） |
| 事務局 | 中沢光政（横田町教育委員会教育次長） 井上賢治（同次長補佐） |
5. 本書の編集、執筆は調査担当が行った。
6. 調査にあたって、次の方から協力を受けた。記して謝意を表す。
島根県木次農林振興センター農地整備課　　横田町土木課　　（有）葛川土木
7. 出土した遺物は横田町教育委員会で保管している。



1. 調査に至る経緯と経過

大谷地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業計画地内において平成12年3月9日、本事業の発注を受けた（有）篠川土木より、工事中において横穴墓らしきものが出土したとの連絡が横田町役場土木課に入った。

これを受け、同日島根県木次農林振興センター農地整備課担当職員2名、横田町役場土木課長、（有）篠川土木の立会いのもと現地確認を行ったところ、天井部の陥没及び須恵器片数点が採取され、横穴墓と確定した。

このことを踏まえ、翌3月10日に事業計画地内を重機により表土剥ぎ取りを行い周辺地の横穴墓有無の確認調査を実施したが、他に遺跡は確認されず、単独の横穴墓であることが判明した。

同年3月15日、椿 真治氏（島根県文化財課文化財保護主事）、島根県木次農林振興センター農地整備課担当職員を交え、遺跡の取扱いについて協議を行った。その結果、当該出土地は計画地の中心部で工事中の発見で、設計変更が困難であるので発掘調査による記録保存との結論に達した。

平成12年3月28日、島根県木次農業振興センターより調査委託を受け、平成12年4月30日までのうち延べ10日間の調査を行った。



遺跡分布状況 (S = 1/15,000)

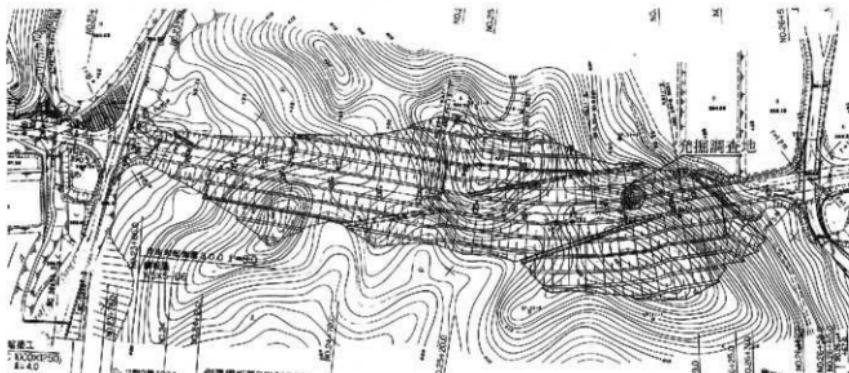
2. 位置と環境

横田町八川地区中心部である古市より4km西方に位置し、南北に派生する丘陵の先端部に開口し、その谷間を流れる大馬木川を西側に望む。

この周辺は良質な真砂砂鉄を産する地域で、広範囲にわたって鉄穴流しが行われていたことが知られ、たたら製鉄跡の分布も多く所在する。この丘陵も、古来行われた鉄穴流しによって現在は独立した山となっており、北側斜面は鉄穴流しによる地形変貌がいちじるしい。この山を「中山」と呼ぶが、その由縁はこのためである。

この中山は標高428m、水田からの比高約40mを頂点とした急峻な丘陵で、横穴墓は南斜面を15mほど下がったところに開口している。この横穴墓より大馬木川を挟んだ西側対岸500mにも同事業工事中に発見された白根垣内横穴墓が知られている。

また、この中山には古くより周知されている横穴式石室の杭木古墳が丘陵突端に開口しており、明治22年の切図にも「穴觀音」と小字名記載されている。



発掘調査地地形図 (S=1/2,000)

3. 遺構

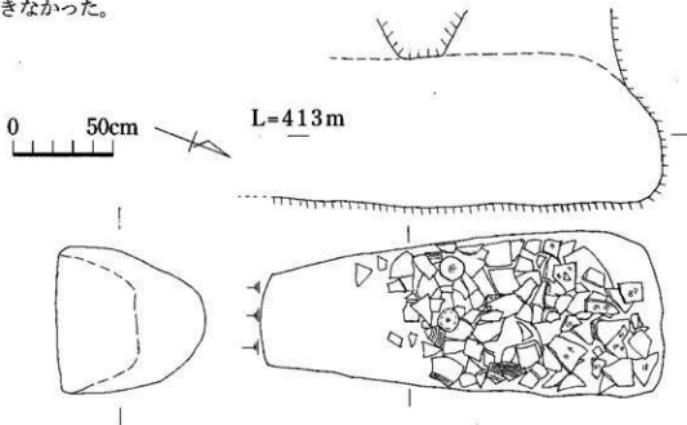
大馬木川を望む南斜面の標高413mのところに穿たれた小さな横穴墓で、最頂上部から15mほど下がったところに開口している。

工事中に発見されたため、天井部及び墓道、羨道は破壊されており横穴墓全体の様相は不明であるが、横穴墓の形状は三角テント型を呈する奥出雲でよく知られた形態のものである。

しかしながら、玄室内の最大幅0.83m、奥行き約1.50m、高さ0.71mという非常に小さななもので、通常一般的に見られる横穴墓の半分程度の大きさである。奥より手前に向かって約130cm程に須恵器片を敷き詰めた須恵器屍床となっており、同じく奥より

100cm程のところに蓋杯のセットがおそらく枕として伏せておかれたものである。その他に鉄器などの副葬品は伴出しなかった。

また、遺骨も全く残存しておらず、篩により歯牙の検出を試みたが確認することができなかった。



杭木中山横穴墓実測図

4. 遺 物

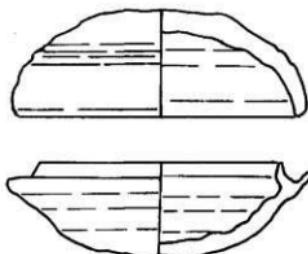
出土品は、埋葬者の枕として用いられたと推察される須恵器の蓋杯のセットと屍床として用いた須恵器片152点の合計154点が検出されたのみであった。

須恵器の蓋は高さ4.3cm、直径12cmを測り、青灰色で焼成は良い。天井部と体部の界は沈線2条で区画する。

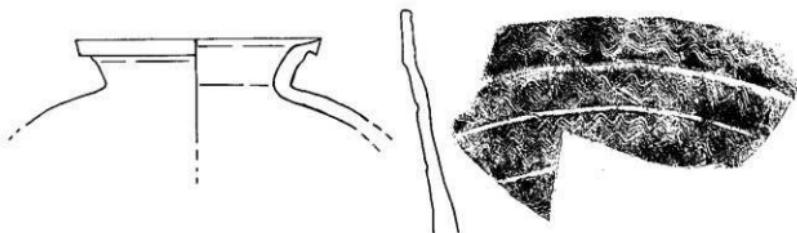
蓋身は、高さ4.1cm、口径9.8cm、受け部径12.8cmを測り、受け部の立ち上がりはやや内傾きである。

屍床に用いた須恵器片は口縁部の破片などから壺の3個体程度と推察される。

出土土器の形状から山本編年IV期、出雲編年5期にあたる時代で、古墳時代後期にあたるものである。



須恵器蓋杯実測図 (S=1/2)



須恵器甕実測図 (S=1/3)

5. まとめ

本横穴墓は、南北に延びる丘陵の大馬木川を望む隣接に横穴がない独立した1穴のみであることとは、群をなす一般事例と異なる点である。

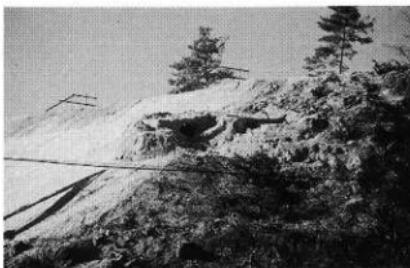
発掘調査の結果、遺構が非常に小さいこと、屍床としての須恵器片の分布状況、蓋杯の位置から推察すると葬道入口を頭にして奥側を足とする形態で埋葬されたものであると考えられる。そうすると、これより奥行きは100cm足らずであり、身長100cm以下であることがいえる。また、歯牙が検出されなかったことなどを総合すると、1歳未満の乳幼児であることが推察される。

また、元鳥取大学医学部法医学教室の井上晃孝助教授に照会したところ、同様の考えでよいであろうとの回答を得た。

以上、生後間もなく死亡した乳幼児を埋葬するために小型で簡易な横穴墓単体として穿たれたものであろう。



遠景 (南西より)



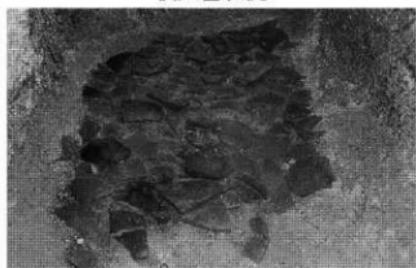
近景 (南西より)



横穴墓状況



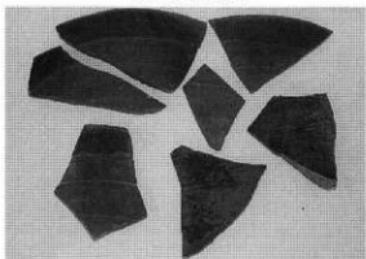
完掘状況



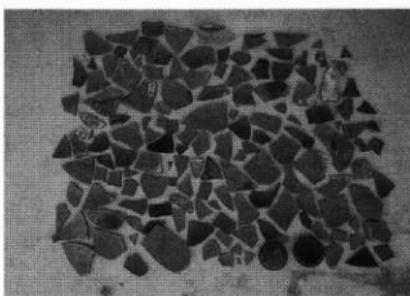
玄室内状況



蓋杯セット



甕口縁部



全出土品 (154点)

発掘調査報告書

杭木中山横穴墓

2000.4

発行 横田町教育委員会

印刷 (有)仁多印刷